「世界史の哲学」から見た戦後世界——高山岩男を手がかりとして——

李　嘉　棣

はじめに

帝国日本による戦時動員と総力戦体制の構築を理論的に根拠づけようとした知識人の多くは、戦後日本の言説空間においても一定の存在感を示した。この点を指摘したのは、総力戦体制の貫戦的連続性に着目した一九九〇年代の研究である。その代表的な成果である『総力戦と現代化』において、この国際共同研究の中心であった山之内靖は戦後世界について、「第二次大戦後の諸国民社会は、総力戦体制が促した社会の機能主義的再編成という新たな軌道についてはそれを採択し続けたのであり、この軌道の上に生活世界を復元したのである」と指摘している。[1] そのうえで、山之内は経済学者大河内一男を取り上げ、「戦後日本の社会科学」と戦時体制との関係について、次のように述べている。

> 大河内は軍部独裁に抵抗したのであったが、しかし、戦時動員体制の合理化には積極的に貢献したのであった。……大河内に代表される戦後日本の社会科学は、その成立の根拠を、総力戦そのものへの抵抗に求めるものではなかったのであり、戦時体制の合理化に貢献すること、ここにおいていたのである。[2]

日本の戦後史を振り返ると、このような知識人のなかには、大河内のような革新派寄りの人だけでなく、保守派に

分類される人もいたことがわかる。高山岩男（一九〇五～九三）もその一人である。一九三〇年代に京都学派の気鋭の哲学者として活躍し始めた彼は、戦時期には「世界史の哲学」を唱え、「世界史的立場と日本」をはじめとする一連の座談会に参加し、そこで欧米中心の「近代」世界の衰退と、アジアを率いる日本を中心として実現されるはずの「近代」的世界秩序の超克を説き、時論家としても名を馳せた。[3] 戦後の高山は、「世界史の哲学」という言葉自体は用いなくなるものの、自説の正しさを信じ、[4]「世界史」の観点から国内・国際問題を論じ続けた。[5]

高山岩男に触れる先行研究の多くは、彼を京都学派の哲学者の一員と位置づけつつ、戦時期における京都学派の「近代の超克」論について考察するものである。[6] 戦後における高山の思想を対象とする研究も、少ないながらいくつか存在し、貴重な示唆を与えてくれるが、十分に研究が深められているとは言いがたい。たとえば、米谷匡史「「世界史の哲学」の帰結――戦中から戦後へ」[7]は、高山の戦中期言説の戦後における「帰結」を見届けようとするもので、さらなる展開を見ていくものではない。花澤秀文『高山岩男――京都学派哲学の基礎研究』[8]は、伝記および哲学史としての性格の強い著作である。福嶋寛之「高山岩男の進歩的知識人批判」[9]は、全体としては高山の国内問題に対する見方を論じたもので、戦後における高山の国際認識を掘り下げていない。岩井洋子「田辺元と高山岩男における「第三の社会」」[10]も、戦後における高山の「協同社会」構想は資本主義の超克を企図するものであったという重要な点を指摘しているが、その構想を当時の国際情勢と関係づけて考察しているわけではない。総じていえば、高山は戦後も「世界史」の観点を維持していたにもかかわらず、戦後の国際情勢とそこにおける日本ないしアジアのあり方に関する高山の思想はいまだ十分に研究されていないと言える。

そこで、本稿では、以上のような先行研究の不足を踏まえ、敗戦から六〇年安保までの時期に焦点を当てつつ、当時の国際情勢とそこにおける日本・アジアのあり方に関する高山の思想について、戦時期の「世界史の哲学」からの系譜を念頭に置きながら考察する。[11] この作業を通じて、戦中から戦後への高山の思想の連続性をより明らかにしたうえで、山之内が指摘したのと異なる、日本思想史の貫戦史的展開のもう一つの側面に光をあて、戦後日本の言説空間のうちに高山を位置づけることを試みたい。

一　「世界史の哲学」から見た戦時世界

戦後における高山の国際認識を論じる前提として、まず

は戦時期に出版された高山の論文集『世界史の哲学』[12]を踏まえつつ、彼の「世界史の哲学」と戦時期における言論活動[13]を概観することにより、戦時期における彼の国際認識、すなわち「世界史の哲学」から見た戦時世界の光景を確認しておきたい。

『世界史の哲学』は、ヨーロッパを世界の中心とする「世界一元論」や、ヨーロッパを最高の発展段階とする「歴史性即時間性」の観念に対する批判から始まる。高山は、従来「世界」そのものと考えられてきたヨーロッパ世界を相対化し、それが「一つの近代的世界に過ぎぬ」と捉えたうえで（二頁）、十九世紀から二十世紀初頭にかけてのヨーロッパ列強の対外拡張は、「漸くヨーロッパ外との関係を離れてはヨーロッパ自身の生存さえ維持し難いという事態に立至ったことに外ならない」と指摘し、そこには「世界史の転回が生ずべき傾向を察し得る」としている（四二三～二四頁）。

高山から見れば、第一次世界大戦は、そのような「世界史の転回」としてあった。この戦争の根本原因について、彼は次のように述べている。

> 戦争の根本要因は帝国主義的争覇にあり、更にこの根柢には経済、社会、政治、外交に亙って、事実と理想との相容れぬ思想的原理が存していた。近代ヨーロッパ世界の構成原理となったいわゆる自由主義は、この事実と理想との諧和を基調とするものであったが、実際は寧ろ両者の分裂乖離を帰結するものであった。一方に於て、自由競争は必然的に弱肉強食による不平等の権力的事実をもたらしてくる。而も他方に於て、意志自由の原理に立つ人格主義的な形式道徳の理念が通用するものとせられる。（四三四頁）

このように、高山にとっての第一次世界大戦は、ヨーロッパ世界の衰退の兆しを見せただけでなく、「自由主義」という「ヨーロッパ近代の原理が完全に破綻を示した」出来事でもあった（四三三～三四頁）。にもかかわらず、ヴェルサイユ体制と国際連盟に代表される戦後の国際秩序は、「全く大戦を帰結するに至った近代的原理に立脚する」ものであり、「依然として権力に基づく既成事実の秩序の上に、戦勝国を中心として作られた」、「有色人種に対する白人の優越と支配とが依然維持せられた」ものである点に、高山は不満を抱いていた（四三四～三五頁）。

『世界史の哲学』において、ヨーロッパ中心の「世界一元論」「歴史性即時間性」の代わりに打ち出されるのは、ヨーロッパ以外の世界への関心を呼びかける、「世界多元論」と歴史の「空間性（地域性・地理性）」の主張である。高山から見た「ヨーロッパの世界支配に対する対抗勢力」

は、第一次世界大戦を経て大きな発展や転換を遂げた日本、アメリカ、ロシア＝ソ連である（四三七頁）。そのなかで、アメリカはヨーロッパ国家ではないものの、「成立の当初より、イギリスに対して一種の親族関係を有する」ため、イギリスとともに、従来の「世界のアングロ・サクソン的秩序の維持と強化」に取り組んでおり、日本のようなその障害となる国を、ワシントン体制という「東亜のヴェルサイユ秩序」のもとで圧迫しているとされている[14]（四三七～三八頁）。また、一九四二年開催の「総力戦の哲学」座談会において、高山は米英が発した大西洋憲章における「自由主義」の主張を取り上げ、それが「結果的には相容れないやうな民族自決と植民帝国と、抽象的倫理と実力的支配」をもたらすとし、第一次世界大戦後の国際秩序と変らずに「近代思想でできてゐる」大西洋憲章を批判している[15]。

高山にとっては、日本こそが既存の世界秩序と欧米の世界支配を打破できる勢力であった。『世界史の哲学』では、高山は東アジアを高く評価したうえで日本にフォーカスするかたちで、まず次のように語る。

> ヨーロッパの支配に最も強い抵抗を示し、その植民地化をどこまでも拒否しようとしたものは東亜であった。支那はその長い中華意識の伝統によってヨーロッパ列強に対抗の態度を示し、我が日本は国体を根幹とする強固な国家意志と民族的矜持とを以て、よくヨーロッパの東亜植民地化の趨勢に否定の抵抗力を発揮した。（四二四～二五頁）

しかし、列強のアジア侵略が加速し、ヨーロッパに倣った近代国家建設が急がれるなか、日本はそれに成功し、中国は失敗した。高山はこの違いについて、「強い精神的自主性を有するが故に、却って自由にヨーロッパ文化の摂取を試み得たところに、支那と異なる我が国の独自な精神的特質が存する」と日本固有の精神を称え、「アジアに於ける日本の近代国家化の事実は世界史的意義を有する重大な事件である」と位置づけている（四二七～二八頁）。

以上のような、欧米が主導する近代的国際秩序への批判と、世界におけるアジアの特殊性、アジアにおける日本の特殊性への認識を踏まえ、高山は「大東亜戦争」と「大東亜共栄圏」の道義性を主張していく。

第二次大戦はイギリス及びアメリカの維持せんとするこの帝国主義に対する闘争である。従って、そこには新たな世界観と新たな道義的理想とが貫いている。

> ……我が国は歴史的伝統と地域的特殊性に結びついた各民族各国家が、それぞれその所を得ることを以て、新たな世界秩序を建設すべき道義的原理となし、これを中外に宣言している。（四四六頁）

さらに、「総力戦の哲学」座談会でも、彼は「日本は何といふか、アジアを代表するような、アジア民族の指導者といふやうな主体性を発揮したわけだ。ヨーロッパの帝国主義の攻勢を挫いた唯一の国民なんだから」と述べ、アジアに対する日本の指導の正当性を説いている。[16]

衰退したヨーロッパに代わり、破綻した「近代的原理」に立脚する旧来の国際秩序を維持しようとするアメリカに対し、固有の文化と精神をもってヨーロッパに抵抗してきた東アジアのなかでいちはやく近代化を遂げた日本は、「アジア民族の指導者」として、道義性のある新たな世界秩序を樹立するために、欧米の帝国主義と闘っている――「世界史の哲学」から見た戦時世界の光景とは、このようなものであった。では、その後の高山は、「世界史の哲学」をどのように受け継ぎ、戦後世界を分析するのか。

二　戦後初期における高山岩男の国際認識の変遷

戦時期の高山は、ヨーロッパとアメリカを批判の対象としていたが、まだ対日参戦していないソ連にはほとんど目を向けていなかった。しかし、戦争末期にソ連が連合国側に立って対日参戦し、帝国日本を降伏に追い込み、戦後の国際秩序の形成において重要な役割を果たすようになると、高山の国際認識も米ソを中心に展開するようになる。

敗戦直後の高山は、米ソの台頭を承け、戦時期の自説を修正しはしたが、「世界史の哲学」の立場を放棄しはしなかった。一例をあげると、高山は一九四六年の論説「文化国家の理念[17]」において、「近代国家」の衰退という論点を戦時期から継承しつつ、ヨーロッパ諸国のみならず日本もそこに含めたうえで、「近代国家」を超える「超近代国家」として米ソを位置づけている。

> 今次世界大戦に見られる一つの顕著な現象は、後進的近代国家（日独伊）が完全に敗退し、先進的近代国家（英仏）また世界の支配勢力たる貫禄を失い、古い歴史を有せぬ米国及び蘇連が雄大な国力を示し、世界の支配的乃至指導的国家となったということである。然るに、この米国と蘇連とは世界史的範疇としての近代国家というものには包摂し切れぬ要素を有し、超近代国家とも称すべき相貌を備えている。（二三頁）

高山によると、「近代国家」とは「同質的民族がそれぞれ独立の主権を有して対立する小国家」である（同頁）。このような把握に立つ高山は、巨大な多民族連邦国家である米ソは「超近代国家」であり、戦時期日本の広域圏構想はこれらの「超近代国家」に対抗して「近代国家」を超出しようとした試みにほかならず、また戦後の国際連合にも

「近代国家超出の傾向」＝「広域秩序乃至広域主義」が見えるとしている（二六頁）。一方で高山は、米ソのイデオロギーは依然として古く近代的であるとし（二四～三七頁）、資本主義と共産主義の「両者を止揚する如き第三の独自な方途」の確立が必要であり、戦後日本はそのような「新しき世界の原理を先取しつつこれを構想すべき」であると展望していた[18]。

一九四〇年代後半から五〇年代にかけての冷戦構造の確立とともに、米ソに対する高山の批判も強まった。この時期の高山は、「近代国家」を圧倒する米ソの国力を認めてはいたが、米ソはともに「露骨な権力国家」であり、米ソの対立も「帝国主義的争覇」の一面を持ち、それが「人類が三千年も前から飽きることなく繰返して来た現象」にすぎないとし、「世界の支配的乃至指導的国家」としての両国の進歩性に疑念を示した[19]。さらに高山は、米ソのイデオロギーに対する批判も強めた。

その起源は如何にあれ、現代の資本主義文明は唯物論的文明である。経済的生産力は地上の全能神であり、経済的繁栄は地上の楽園である。このような唯物的人生観は、経済的唯物史観を指導理念とする社会主義や共産主義でも変るところがない。従ってこの種の資本主義国も共産主義国も、将来の世界史の指導を担当する文明史的国民だとは考えられない……近代文明を絶対視するこの唯物論的国々が、その生産力や武力の物的実力を背景に権力の衝動に駆られて動き、その上素朴なメシアニズムの信仰に走ることこそ、現代における最大の危険なのである[20]。

このように、高山は、一見「超近代的」に見える米国もソ連も、依然として「近代」的イデオロギーに囚われているため、「将来の世界史の指導を担当する」ことはできないと考え、また「近代」的なイデオロギーを盲信する米ソが冷たい戦争を熱い戦争に転化させる危険性を憂慮していた。

以上の議論からも、戦時期の「世界史の哲学」の観点が修正されつつ継承されているさまを見て取ることができるだろう。要するに、第一次世界大戦後には「近代」的原理に基づくヴェルサイユ・ワシントン体制が超克の対象とされたとすると、第二次世界大戦後には依然として「近代」的原理に基づいているとされた米ソを両極とする冷戦構造が超克の対象とされたのである。

ところで、米ソが混同して論じられることも多いが、高山から見た両国はやはり異なる存在であった。高山は一九五二年に欧米を視察しているが、その視察記において、彼はアメリカの「盛な若々しい産業力と生命力」に触れてお

り[21]、「終戦直後のように何でもかんでもアメリカ崇拝に陥るのも不見識極まる話だが直ぐまた反動でアメリカを軽蔑するのも同様に間違った話である」ことを主張し[22]、中立的なアメリカ認識の重要性とその育て方を主として論じている。

一方、アメリカに比べ、高山はソ連により厳しい目を向けていた。高山は、共産主義はもともと「近代資本主義の遺せる世界史的課題への一つの解決」であったと評価しているが、ソ連的共産主義に対しては「思想と言はんよりは実は極めて浮動的な大衆感情に過ぎない」と批判している[23]。高山はさらに、帝政ロシアに「プロレタリア革命発生の前提条件」はほとんどなく、ソ連の共産主義は「後進民族の産業革命」にすぎないため、「古典マルキシズムが約束する如くにみえる社会主義的な精神、即ちヒューマニズムとかアイデアリズムの精神とかいうものがすっかりソ連製の共産主義になって消えてしま」っていると指摘し、ソ連は「全体主義」国家であると見ていた[24]。

以上のように、高山は一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、敗戦の衝撃から立ち直り、帝国日本を敗北に追い込んだ米ソ両超大国と、両国が主導する戦後の世界秩序を、批判的に捉えなおす観点を獲得していった。彼の観点は、戦時期の「世界史の哲学」から継承されたものであり、第二次世界大戦後の冷戦構造とその担い手の米ソ両超大国のイデオロギーは、第一次世界大戦後のヴェルサイユ・ワシントン体制とそれを裏付ける秩序原理と同じく、「近代」的なものとして見限られたのである。では、高山は、このような認識のもとで、依然として「近代」的な世界秩序に代わる新たな秩序原理についてどのように考え、また戦時期に「近代」的な世界秩序を超克するとされた日本とアジアにどのような期待を寄せるのか。

三　「第三の道」に関する高山岩男の構想

すでに破綻している「近代」的イデオロギーを盲信する米ソ両超大国と両国間の不毛な冷戦に対抗するかたちで、高山は、ふたたび戦時期のように、新たな国内・国際秩序を構想していくことになる。その際の彼の論点の中心は、戦後最初期に掲げた米ソのイデオロギーに対する「第三の独自の方途」をさらに具体化させた、「第三の道」構想であった。

高山の「第三の道」構想の基盤にあったのは、「協同主義」に基づく「協同社会」への志向である。高山は、自由主義と社会主義、資本主義と共産主義の対立に対しての、「協同主義」の「第三の道」としての独自性と進歩性につ

いて、次のように述べている。

われわれが協同主義と名づけるものは、資本主義でもなければ共産主義でもなく、単なる自由主義でもなければ単なる社会主義でもない。それらの対立に対していえば「第三の道」を歩むものである。第三の道というのは単に両極の中道ということではない。両極を折衷し折半するということではない。誤れる道の中間は依然として誤っている。われわれが第三の道というのは、対立する両極とはその根本で本質を異にし、両極の対立を超出する道のことを意味するのである。[25]

当時の高山は、「資本主義の社会主義化」と「共産主義の民主主義化」が並行して進行する傾向にあるという認識に立っていたが、「相反する傾向の高次の総合を先取する積極的立場」の必要性を指摘し、「日本の将来」は「福祉国家を目指し、穏健社会民主主義の思想的立場に立つべき」であると主張していた。[26] 先行研究でも指摘されているが、当時の彼が西欧と日本の社会党右派に期待を寄せていたのも、[27] この立場に関係していると言える。

ここで、高山の構想のなかの、「第三の道」を切り拓くべき主体に関する部分に目を転じてみると、高山は、かつての「世界史の哲学」の立場を受け継ぎ、戦時期と同じく日本とアジアに注目していたことがわかる。その際の彼の論理は、次に見るように、敗戦直後に行われた戦後日本の課題の分析を、アジアへと拡大するものであった。

戦時期の高山は、「日本の今日の主導性といふものは日本が近代を完成したといふところから出てくる」と主張していたが、[28] 敗戦後には、日本は近代的国力と近代的精神の両面において後進的であり未熟であるという認識に立ち至った。[29] その彼が敗戦直後に日本のあり方をどのように考えていたかを把握するには、一九四六年の論文集『文化国家の理念』が参考になる。その序文において、高山は、近代世界の衰退に加えて日本の後進性にも言及しつつ、後進国日本が先進国との距離を縮めるためには「後向きの近代化」と「前向きの超近代化」を同時に遂行せねばならないと論じている。[30] その後、アジアにおける脱植民地化が進むなか、高山は、一九五三年の論説「アジアに寄せる希望」[31]に見られるように、アジア諸国もまた日本と同じく「近代化」と「超近代化」を同時に遂行するという課題に直面していると把握していた（一六頁）。

高山が考えたアジアの向かうべき方向性は、米ソとは異なる近代化の道であり、米ソのイデオロギーの止揚であった。高山から見れば、アジアの近代化に「西洋風の科学文明、機械文明」は必須だが、アジアは必ずしも米ソを学ぶ必要はない（一五頁）。その理由として彼は、「西欧文明」

は米ソを「世界の支配勢力にし」たが、米ソは「科学と技術を唯物論の人生観に結合」するという「誤謬」を犯しており、その結果である米ソ冷戦と原水爆は「世界の終りを予示」するに至っていることを挙げている（一四～一六頁）。これを踏まえ、高山は、「アジアは近代化と同時に近代化の脱却と超出を試みなければならぬ」ことを強調し、アジアが行うべき「近代化」と「超近代化」の同時遂行は米ソのどちらにも偏らない「資本主義の理想と共産主義の理想との新たな総合」であるべきだと主張した（一六頁）。すでに見たように、高山は、「第三の道」としての「協同主義」についても、それが「対立する両極とはその根本で本質を異にし、両極の対立を超出する道」であると論じていた。つまり、アジアは「近代化」と「超近代化」を同時に遂行することによりまさにそのような「第三の道」を歩むことができるというのが、この時期の高山の主張であった。

このようなアジアに対し、高山は大いに期待していた。彼はアジアが「第三の道」を開拓できれば、「二つの世界の紛争」から中立を保ち、「破局の危険を孕む二つの世界の対立に調停と媒介の積極的役割を演ずる」ことができると展望し、それを「新生アジアの世界史的使命」であるとした[32]。ところで、この時期の高山にとっても、アジアにおける日本は、やはり特殊な存在であった。彼は日本を「アジアの先進国」と位置づけ、日本がアジアで率先して「社会民主主義」を建設できれば、「アジア諸国の直面する課題に対し、日本が指導的思想的役割を演ずることが可能となる」と考えていた[33]。

高山は、「アジアの叡智」に期待し、アジアにおける「近代化」と「超近代化」の同時遂行＝「第三の道」の開拓は、十分に実現可能であると考えていた。実際、彼は前掲「アジアに寄せる希望」において、「近代数百年のヨーロッパ文明に潜む狂いを直すような新しい文明の理念」を生み育てる希望を「ヨーロッパ文明と質の違ったアジアの、特に東亜の文明の精神の中につなぐ」ことを展望し（一六頁）、また「第三の道の新世界観を、近代西洋文明の実験と東洋文化の精神とを顧慮して建設せよ」と呼びかけていたのである[34]。

「第三の道」構想には、高山のソ連に対する見方を垣間見ることもできる。高山は当時、前述の「共産主義の民主主義化」の趨勢を指摘していたが、一方では、ソ連における「一国社会主義の建設」は「資本主義と共産主義とに対する第三の道を意図し構想」されたものではなく「飽くまで革命の精神をマルクス主義に仰ぐ共産主義の実現が目標」とされていると批判している[35]。また、彼は「近代的な自由主義や民主主義の伝統なきアジア」のような「後進国

が産業革命を推進する場合は、国家権力を後楯とする経済計画の実行より他ないので、この要求は左にせよ右にせよ全体主義に赴かしめ易い動向を孕む」と憂慮していた[36]。

米ソの「近代」的なイデオロギーの止揚、冷戦構造に取って代わる新たな秩序原理の創造は、近代化の後進国であるアジアが「近代化」と「超近代化」の同時遂行によってかえって実現できる。その際、アジアの伝統と歴史はプラスに働く――「第三の道」をめぐる以上のような高山の議論には、戦時期の「世界史の哲学」の形を変えた復活を見て取ることができるだろう。しかし、世界情勢は常に変化する。一九五〇年代の「雪解け」の時代が終わり、一九六〇年前後に日米安全保障条約が大きな争点となって日本の外交政策が厳しく問われるなか、それまでアジアから米ソの対立を超克することを構想していた高山は、どのような時論を展開することになるのか。

四　高山岩男の「中立」研究と「第三の道」構想の後退

高山の「第三の道」構想は、ソ連に対する不信感・嫌悪感と、アメリカに対する違和感を同時に表明しつつ、アジア主義的な側面も見せており、戦後日本の革新派にも保守派にも完全には同調しない独自な思想的特徴を示している

と言える。しかし、アジアは「第三の道」を歩むべきだと主張する高山は、日本の外交政策を論じるにあたっては、「中立」研究の文脈を前面に押し出し、その結果「第三の道」の展望と齟齬を来してしまうことになる。

高山の「中立」研究は、「第三の道」構想とほぼ同じ時期に世に出された。前述したように、一九五二年に欧米を視察した経験を持つ高山は、その際の見聞を「中立」研究の出発点としている。彼は帰国直後の一九五三年からスイスやスウェーデンの中立に関する文章を執筆し始め、一九五五年にはこの点に関する研究も本格的に始めた[37]。以下では、一九五五年の「中立政策の歴史的思想的考察と分析[38]」を中心に、高山の「中立」論を検討していく。

高山によると、中立には複数の種類があるが、彼が主として論じたのはスイスの「永世中立」とスウェーデンの「中立政策」である。そのなかで、すぐのちに紹介するように、高山はスイスよりスウェーデンのほうが日本に似ているとし、スウェーデンの「中立政策」が成功する客観的・主観的条件を、(1)小国であること、(2)現状維持国であること、(3)強大国に中立尊重の意思があること、(4)中立堅持の決意と軍備があること、(5)軍事上の要衝に当たらないこと、の五つにまとめている（三一～四一頁）。

高山は、戦後世界において中立を堅持することの難しさ

を痛感していた。彼は、冷戦に巻き込まれたくないアジア諸国の中立願望について、それは「自然な心理」であるものの、「中立を願望すればする程、二つの世界への圧力が陰に陽に押寄せることも否定し難しい事実であり、中立は容易ならざる難業に属する」と考えていた[39]。高山は、日本の場合については、「スイス流の永世中立たる途は、初めから問題にもならない」と断る一方、スウェーデンと対比し、①日本は小国でも現状維持国でもない、②日本の中立が同時に米ソの利益となることはない、③日本は米国から離脱して自活することはできない、④中立を願望する国民意思の一致がない、⑤憲法の制限と敗北意識により自国を護る防衛意思がない、という五つの理由を挙げ、日本がスウェーデンのような「恒久的中立政策」をとれる可能性はないと論じている（五三～五四頁）。前述したように、高山は、「第三の道」を論じる文脈ではアジアないし日本の中立を強く意識していたが、アジアとりわけ日本が中立を守ることの難しさを主張するその「中立」研究は、自らの「第三の道」構想を否定する契機を内包していたのである。

ところで、なぜ高山は、欧米視察から三年が経った一九五五年に至って、「中立」研究を本格化したのであろうか。「中立政策の歴史的思想的考察と分析」の冒頭において、高山は、同時代に「中立政策が台頭して来ている理由」について、「中立を願望する国」がアジアに数多く現れてきているという要因のほか、「ソ連の中立化政策から来ている」面もあると指摘している（一七～一八頁）。この「ソ連の中立化政策」のなかで高山が注目しているのは、西ドイツや日本のような冷戦の最前線にある民主国家をなるべく中立化の方向に導こうとする試みや、「中立地帯（ニュートラル・ベルト）」形成の提唱などである。同じく一九五五年に発表された論説「平和共存体制とアジアの役割」では、ドイツの中立化は、ジュネーブ会議でインドシナ戦争の休戦協定が結ばれ、スターリン没後のソ連が「平和的共存」路線を表明したあと、アメリカと勢力均衡状態に入ったソ連が打ち出した、現状打破の策であるとされている[40]。つまり、高山が一九五〇年代半ばに「中立」研究を始めたのは、スターリン没後のソ連における平和共存路線の提唱の影響が大きかったと言える。

このような、ソ連によって提起され、当時の日本で盛んに論じられていた「中立」という課題について、ソ連に強い警戒心を抱いていた高山は、日本は中立政策を取れる可能性がないだけでなく、取るべきでもないと考えるようになる。彼は「平和共存体制とアジアの役割」において、中立は「漸く安定を見せつつある二つの世界の勢力均衡」に対して「これを一層安定化する働き」をしなければならな

いし、またどの陣営に加担するかを決定したり、中立政策を取るかどうかを判断したりするには「一辺倒的に傾倒しない」、「二つの世界の対立に批判的な中立の精神を保つ」ことが必要であると述べ、中立にさまざまな前提条件を設定していたが[41]、高山の観点からすると、日本はそのような前提条件を満たしうる存在ではなかった。彼は、同年に発表した前掲「中立政策の歴史的思想的考察と分析」においては、日本を中立国家にするのは「自由世界には極めて不利であり、中ソ共産陣営には極めて有利である」のみならず、当時の日本における「中立思想」はみな「プロ・コミュニズム」的であり、「政治上は少しも中立的でない」と考えていた（五四～五五頁）。

一九四〇年代後半以来たびたびソ連を批判してきた高山が、日本の中立と関わって以上のような観点を持つのもおかしくない。とはいえ、この観点は、日米同盟支持に直結するわけでもなかった。実際、高山は当時、日本が「自由世界、対米協調の線に入っている」ことについて、「これは敗戦の結果生じたものであって、必すしも日本の自由意思から発生した事実ではない」と考え、戦後日本のあり方に不満を抱いていた（五四頁）。彼は、「ソ連とアメリカ、共産陣営と自由世界の何れを選ぶかと迫られるならば、必ず選ぶであろうと想定される意味で大多数がこれを選んだものである」（五四～五五頁）と述べ、反ソ・反共の立場から日米同盟を容認し、日本の中立に反対しつつも、それは積極的な選択ではなく迫られた結果にすぎないと主張していた。

周知のように、日本が米ソの「何れを選ぶか」という点は、高山が以上のような内容の論説を発表したわずか数年後に、かつてないほど喫緊の課題となった。一九五〇年代末から、日米安全保障条約の改定をめぐる議論が白熱し、やがて安保闘争にまで発展したのである。そのなかで、ソ連ないし国内の革新勢力を警戒し、日本にとって中立は不可能かつ不適切な選択肢であると考える高山は、結局、反・反安保の立場から、日米安保を支持することになる。以下では、六〇年安保を経たのちの論説、一九六一年の「反米と安保反対の心理的分析――日本知識人は何故左傾するか[42]」を中心に、その詳細を見てみよう。

高山によると、日本人による安保反対は中立を願望する「自然な心理」から来る一面がある。戦後、「無軍備の弱国」になった日本においては、「強い不安感が潜在」しており、このような日本が「本能的に自国の安全を保障する方法として求め」ているのが中立であり、高山はそれを「逃避的な中立に安全感を求める」こととして位置づけている（八六～八七頁）。そして、「東洋のスイスたれ」という

マッカーサーの煽動によって、日本の知識人も「無軍備中立が可能である」と信じるようになり、ソ連と中国がこの「中立心理」を利用して「アメリカと軍事同盟を結び、アメリカの基地などを置くならば、ソ連のミサイルで壊される危険があるぞ、広島、長崎以上の危険を覚悟せよ」と日本を恫喝した結果、「いよいよ中立を求める心理が出てくる」ことになったと、高山は述べている（八七頁）。

このように中立を願望する「心理」を批判的に分析しつつ、自らの研究において日本に中立は得策ではないという結論に達した高山は、安保に反対する当時の日本知識人に対し、日米安保に頼った安全保障こそが日本にとっての理性的な選択であると呼びかけるに至る。

知識人が冷静に考えるなら、自国の安全保障策として中立を考えるにしても、スイス、スエーデンの如く、一致した国論と固い決意の下に充実した軍備をもつ方策を考えるのが当然である。或は日本の地理的条件から、又現状打破の国民性や潜在的大国という条件から、中立などは不可能と自覚するなら、集団安全保障体制の中に入って日本のセキュリテイを維持するというのが理性的な考え方であることは申すまでもない。（八七～八八頁）

高山はそのうえで、反安保運動は「ムード的に中立を良しとする運動」であると指摘し、「理性がすっかり感情に圧倒されて」「ソ連中共の「中立化」の呼びかけに恰も呼応するが如くに動いている」人びとを批判している（八八頁）。

以上のように、高山は、「中立」研究を深めるなかで、日本にとって中立は困難であるという結論に至り、さらに日米安全保障条約改定をめぐる論争においては日米同盟を積極的に支持するという選択を行った。ここには、アメリカに対する違和感を表明しつつ日米同盟は迫られた選択であるとしていた一九五〇年代半ばからの転換があると言ってよい。この転換にともなって、アジアと日本に自主性を求め、米ソのイデオロギーと冷戦構造の超克を展望しようとした「第三の道」構想は、当然のことながら後退し、高山の論説から姿を消した。ここに至って高山は、戦時期の「世界史の哲学」以来の、既存の国際秩序の超克を志向する思想的展望を失うことになったと評価できるだろう。

おわりに

高山岩男は、戦時期に、欧米中心の「近代」世界の衰退とアジアを率いる日本による「近代」的世界秩序の超克を説く「世界史の哲学」を構想し、時論家として活躍した。

戦後、「世界史の哲学」の立場を修正しつつも継承した高山は、「世界史」の立場から国内外の情勢の変化を分析し、自らの時論に、革新派にも保守派にも同調しない独自な性格を与えた。たとえば、一九五三年二月にスターリンが死去し、ソ連が平和共存路線に舵を切るなか、高山は、米ソ対立のもとでアジアが歩むべき道を、「近代化」と「超近代化」の同時遂行によって開拓する「第三の道」として提示しようとし、また「第三の道」の開拓における「アジアの叡智」の重要性や日本による指導の可能性を説いた。その後、朝鮮戦争とインドシナ戦争が休戦となって平和共存の流れが現実化したこと、そのなかで平和五原則（一九五四年）や平和十原則（一九五五年）が国際的に合意されたこと、そして日ソ国交回復や日本の国連加盟が実現したことなどが、彼の「第三の道」構想を客観的に支えていたと言える。換言すれば、高山の「第三の道」構想は、このような客観的情勢を踏まえた「世界史の哲学」の戦後版であったと評価できるだろう。

一方、「第三の道」構想と並行して、高山は、戦後の欧米視察の経験を踏まえ、「中立」研究も進めた。スウェーデンやスイスの事例に即して「中立」研究を行った高山は、日本の置かれた国際環境のもとではそもそも中立は不可能であり、革新勢力のように日本で非武装中立を唱えても東側に加担することにしかならない、と結論するに至った。高山は、アメリカには好意的ではなかったが、ソ連を強く警戒しており、米ソのどちらかを選ばねばならないとすればアメリカを選ぶしかないと考えていた。

総じて言えば、一九五〇年代の半ば、「世界史の哲学」の立場を継承した高山は、日本を含むアジアが歩むべき「第三の道」を構想したが、それと並行して行われた「中立」研究は、この戦後版「世界史の哲学」の可能性を否定することになったと言える。一九六〇年前後に日米安全保障条約の改定が争点となるなか、ソ連を強く警戒し、日本の中立は不可能であると考える高山は、反・反安保の立場から日米同盟を支持し、自ら「第三の道」構想の可能性を閉ざすこととなったのである。

一九六〇年前後の高山の思想的変遷は、自らが保守の立場にあるという新たな自覚をもともなっていた。一九五九年の小冊子『保守主義と進歩主義』では、高山は、「保守主義」を「革命主義」と「反動主義」に対する「中庸の道、漸進の立場」、「第三の道」であるとし、このような「中庸の立場にのみ本当の進歩がある」と述べ、それまでの「第三の道」構想を自ら換骨奪胎している[43]。このように、戦時期以来、独自の観点から既存秩序の超克を説き続けてきた高山は、一九六〇年前後の政治的激動のなかで、自らが一

人の保守派論客であることを自覚したのであった。六〇年安保後の日本では「戦後」が制度化され「保守」を自称する論者が輩出したと指摘されていることを踏まえると、[44]この時点で、高山は、論壇のなかでの独自性を失っていったとも言える。保守論壇の担い手も、保守への自覚から出発し、現実主義論争の一翼を担った高坂正堯のような、新進気鋭の論客へと入れ替わっていったのである。

本稿では、高山岩男に注目することにより、日本思想史の貫戦史的展開のひとつの側面に光を当てた。高山の事例からわかるように、戦中・戦後の日本における国際秩序論にとっては、たとえその主眼が日本とヨーロッパ諸国・アメリカ・ソ連との関係にあっても、アジアは無視できない要因としてつねに存在していた。したがって、高山がアジアに無関心であったとはもちろん言えないが、しかし、高度に哲学的でアジア社会への具体的視線を欠いていた戦時中の「世界史の哲学」は、東アジアの知識人との緊密な応答関係を喚起することはできなかったし、[45]戦後における高山の時論も、東アジアで反響を呼んだ痕跡は現時点では見出せない。それに比べ、たとえば、戦時期日本のマルクス主義者のアジア社会論・中国社会論や、転向左翼も積極的に関わった「東亜協同体」論は、東アジアの知識人とのより強い応答関係を喚起した。[46]論者の一部は戦後まで活躍したことを考慮に入れると、これらの事例に着目しつつ、戦時期日本の思想の貫戦史的展開を東アジア的広がりのなかで明らかにする作業には大きな意義があると言えるだろう。この点は、今後の課題としたい。

注

(1) 山之内靖「方法的序論――総力戦とシステム統合」（山之内他編『総力戦と現代化』柏書房、一九九五年）一二頁。

(2) 同前、三五～三六頁。

(3) 一九四一年から四二年にかけて開催され、『中央公論』に掲載された座談会「世界史的立場と日本」「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」「総力戦の哲学」は、のちに高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高『世界史的立場と日本』（中央公論社、一九四三年）として出版された。

(4) この点については、後述する先行研究が指摘しているだけでなく、高山自身も「私は自分が世界史の根本理念としたものに誤謬があったとは思わない。……従って根本理念に改変の必要があるとは考えない」と述べ、自ら認めている（「世界史の理念」、『理想』一九五一年六月号、五頁）。

(5) 一例をあげると、高山は「中立」を論じるにあたり、「著者の立場は世界史の観点に立つもので、その上で国際

政治の動きを見ているのである」と述べている（『中立の過去と現在――国際的中立の研究』大学出版協会、一九五六年、四頁）。

（6）主要なものは、竹内好「近代の超克」（亀井勝一郎・竹内好編『近代日本思想史講座』第七巻、筑摩書房、一九五九年）、廣松渉『〈近代の超克〉論――昭和思想史への一断想』（朝日出版社、一九八〇年）、小坂国継「京都学派と「近代の超克」の問題」（藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂、二〇〇一年）、孫歌『竹内好という問い』（岩波書店、二〇〇五年）、子安宣邦『「近代の超克」とは何か』（青土社、二〇〇八年）、酒井直樹・磯前順一編『「近代の超克」と京都学派――近代性・帝国・普遍性』（以文社、二〇一〇年）、鈴木貞美『近代の超克――その戦前、戦中、戦後』（作品社、二〇一五年）、藤田正勝『日本哲学史』（昭和堂、二〇一八年）などがある。

（7）『現代思想』二三巻一号（青土社、一九九五年）。

（8）人文書院、一九九九年。

（9）『福岡大学人文論叢』二〇一三年三月号。

（10）『社会思想史研究』四六号（藤原書店、二〇二二年）。

（11）戦後における高山の著作と活動については、大橋良介他編『高山岩男著作集』第六巻（玉川大学出版部、二〇〇九年）所収の年譜と著作目録（花澤秀文作成、七三九～九八頁）を参照。花澤前掲書では、戦後における高山の所属研究団体と交友関係（二一四～一八頁）、高山の師友関係（四二二～二三頁）などが紹介されている。近年、高山の論著の再刊行が進み、花澤秀文編『世界史の哲学』（こぶし文庫、二〇〇一年）、花澤秀文編『京都哲学撰書 第二十巻 超近代の哲学』（燈影舎、二〇〇二年）、『高山岩男著作集』全六巻（二〇〇七～〇九年）が出版されている。これらの書物の解説も、「世界史の哲学」を含む高山思想を理解するのに役立つ。

（12）岩波書店、一九四二年。以下、本節で同書を典拠とする場合は、本文中に頁数を注記する。

（13）戦時中の高山は、前記の座談会などでの言論活動のほか、海軍省の嘱託としても活動し、同省主催の秘密会合などにおいて、対中国政策、対南方政策、日本の経済と教育など多岐にわたる国際・国内問題について論じている。大橋良介『京都学派と日本海軍――新史料「大島メモ」をめぐって』（PHP新書、二〇〇一年）参照。

（14）ソ連については、高山はその共産主義国家としての異質性を意識してはいるが、それ以上の議論を展開していない（四三七頁）。

（15）前掲『世界史的立場と日本』三四九～五〇頁。

（16）同前、三八四頁。

（17）初出は『文明』一九四六年六・七月合併号。酒井哲哉編『リーディング戦後日本の思想水脈1 平和国家のアイ

デンティティ』（岩波書店、二〇一六年）所収。以下、本節で同論文を典拠とする場合は、本文中に同書の頁数を注記する。

（18）高山岩男「世界史的立場に就いて」（初出は『学習研究』一九四六年七月第一巻第一号。前掲『京都哲学撰書第二十巻 超近代の哲学』所収）一四四頁。

（19）高山岩男「二つの世界に和協の道なきや」（『中央公論』一九五四年二月号）九四～九五頁。

（20）高山岩男『二つの世界に抗して――文明の破局と人類の対決』（中央公論社、一九五四年）六二頁。

（21）高山岩男「欧州から米国に渡って 第五十信――現代の雄はアメリカ・歴史に現れた文化の盛衰 現代の危険は何？」（『静岡新聞』一九五二年一一月二五日夕刊二面）。

（22）高山岩男「欧州をめぐって 第卅八信――米国蔑視は危険・欧州にない特色ある文化 発達した心理学」（『静岡新聞』一九五二年一〇月二九日朝刊二面）。

（23）高山岩男『マルクシズムの超克』（弘文堂、一九四九年）一〇頁。

（24）高山岩男「反米と安保反対の心理的分析――日本知識人は何故左傾するか」（『日本及日本人』一九六一年一月）九四～九五頁。

（25）高山岩男『協同社会の精神』（協同組合懇話会、一九五五年）四四頁。

（26）高山岩男「新しい日本の思想的立場」（高山岩男・矢部貞治編『新しい日本の進路』勁草書房、一九五三年）三五頁。

（27）前掲福嶋論文、八八五頁。

（28）前掲『世界史的立場と日本』三九一頁。

（29）前掲米谷論文、二二三頁。

（30）高山岩男『文化国家の理念』（秋田屋、一九四六年）三三頁。

（31）『弁論』一九五三年一二月号所収。以下、本節で同論文を典拠とする場合は、本文中に同誌の頁数を注記する。

（32）高山岩男「二つの世界とアジア」（近衛霞山公五十年祭記念論集編集委員会編『アジア：過去と現代』財団法人霞山倶楽部、一九五五年）五九頁。

（33）前掲「新しい日本の思想的立場」三三～三六頁。

（34）前掲「二つの世界とアジア」六〇頁。

（35）同前、五八頁。

（36）同前、五九頁。

（37）前掲『高山岩男著作集』第六巻所収の年譜と著作目録を参照。

（38）世界民主研究所編『日ソ交渉の基本問題』（世界民主出版部、一九五五年）所収。以下、本節で同論文を典拠とする場合は、本文中に同書の頁数を注記する。

（39）前掲「二つの世界とアジア」五六頁。

（40）　高山岩男「平和共存体制とアジアの役割」（『アジア問題』一九五五年十月）二一頁。
（41）　同前、二九～三〇頁。
（42）　『日本及日本人』一九六一年一月号所収。以下、本節で同論文を典拠とする場合は、本文中に同誌の頁数を注記する。
（43）　高山岩男『保守主義と進歩主義』（日本文化連合会事務局、一九五九年）四九頁。
（44）　酒井哲哉「解説」（前掲『リーディング戦後日本の思想水脈1 平和国家のアイデンティティ』）三二八頁。
（45）　関智英「日中道義問答――日米開戦後、「道義的生命力」を巡る占領地中国知識人の議論」（伊東貴之編『「心身／身心」と環境の哲学――東アジアの伝統思想を媒介に考える』汲古書院、二〇一六年）は、京都学派の「道義的生命力」という論点は、中国の親日派知識人からの批判を喚起したが、この論争は生産的なものとならないまま終わったことを指摘している。
（46）　ここでは、代表的な先行研究として、米谷匡史『アジア／日本』（岩波書店、二〇〇六年）を挙げておくにとどめる。

＊本稿は中国国家留学基金管理委員会（ＣＳＣ）の助成を受けたものである。

（大阪大学大学院）